浅川 ― 川とまちづくり

鈴木 泰

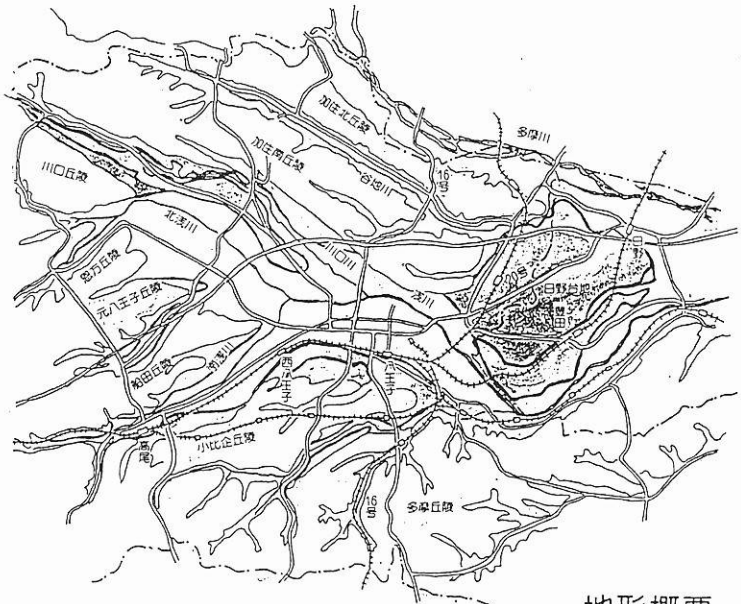
四年位、河川関係のボランティアに関係しておりますが、七〇年代、八〇年代の始めにあったといわれる親水ブームの事など全く知らないで過ごしておりましたから、自然保護団体の人からみると大変な新参者ですし、ずっと河川管理や水関係のお仕事をなさっていた方からみても全くの新参者です。けれども新しい目で川を見たらこんなふうに見えましたと、今日は話そうと思いますので宜しくお願い致します。

今、お手元に資料とホッチキスで綴じた資料、それからレジメ一枚をお配りしましたが、浅川を中心に川とまちづくりをテーマに、先ずスライドで浅川の紹介をさせて頂き、その後で話をさせて頂こうと思いますのでよろしくお願いします。

〈スライド〉

ここは浅川が多摩川と合流するところです。前の方に白く見えているのは、恐らく桜ケ丘かと思います。ここは日野市です。非常に拡がりのある空間を感じると思います。右側は小さなグラウンドと親水デッキになっていますけれども、一面に、今、荻の穂が広がっています。二年程前の写真ですが、今でもほとんど変わらない状態です。

これはそこから少し上流なります。左手に見える白い煙突は日野市の清掃工場の煙突です。河川敷にはたくさんの笹が生えておりまして非常に生物が多いところです。堤防の上の二色に塗り分けられた簡



地形概要

易舗装は、赤いほうが自転車で、白いほうが歩行者のための通路です。

これは今ちょっと場所を思い出せませんが、冬場から早春にかけて浅川の河川敷で鴨がたくさん遊んでいるところです。浅川でも百種類以上の野鳥が見られるそうです。岸で様子を観たところ草の種を食べていたようです。早春でまだほとんど草の芽も出ていなかったし他の餌が有るとも思えません。これは鴨のつがいと、その子供というそんな感じでした。

これがお手元に配りました浅川のワクワクマップというのを作りました時に八王子カワセミ会という所にお願いして他の自然保護運動をしている方や、町づくりをしている青年会議所などの皆さんと一緒に浅川回りをした時の写真です。これは日野市内です。これも、浅川で今通った所より少し上流なんですが、夏、今年は七月十九日に行われた川下りサバイバルレース、報告書のパドルというのがお手元に配られていると思いますが、それの一こまです。

これは、ゴールインするところですが、こいのぼ

りがちゃんとこいのぼりの形のまま下って来るとは思いませんでした。大体このレース十一キロ有りまして、御存じかどうか浅川は文字通り常に水量の少ない川ですからゴリゴリこするわけです。どうして無事なのかと聞いたら京王特殊車体というボディ作りの専門家のチームだったということです。これがゴールの歩道橋で京王線の高幡不動という駅のすぐ傍です。区画整理で余ったお金でとても立派になったといわれる歩行者専用橋です。これも同じく京王特殊車体の皆さんが作っていらしたキシャポッポでちゃんと煙も出れば汽笛も鳴るという大変優れたものでした。このレースにはたくさんの方が参加されるので、その話はまた後でゆっくりやろうと思います。

後ろに見えるあの山は高幡不動です。ここは浅川の堤防が切れて霞堤になっている所で、向こう側にわずかに高くなっている所にびっしりと家が立並んでいます。ここではそうでもないんですが、場所によっては霞堤の内側で明らかに築堤された部分よりも低い所に住宅が続く部分が浅川沿にはかなり在ります。

これは新しくできたマンションです。九一年、丁度バブルがはじける寸前の時に二億四千五百万円で売りに出されました。ちなみに今の処、灯は一つか二つしか点いていないそうで、景観上もはっきり言って箸にも棒にもかからない、なおかつ最寄りの駅も特急の止まらない駅、中央高速のインターチェンジまで車で空いてて十分、込むと一時間近くかかるんじゃないかと思われる場所に建っているというそういうマンションでした。これは八高線です。首都圏で唯一のローカル線と云われ未だに単線ヂーゼルです。

これは堤防の下に咲くノイバラです。向こう側に見えるのが八高線の鉄橋で、その少し下流になります。ノイバラの花は浅川では五月の終わり頃、河原に丁度雪が降った様に真っ白に咲く所もあります。

同じ時期にスイカズラとかイボダヌキとか、白い綺麗な花が咲いて香りの良い花がたくさん河原に見られます。人間にはちょっときついバラですが、動

物にとってはとても良い隠れ場所と餌を採る場所になります。

これがノイバラの冬の姿です。赤い実が成っていますが、これは多分「テリハノイバラ」と云うちょっと違う種類と思いますが、浅川にはこの二種類のバラが生えています。この実は非常にビタミンが多いそうで野鳥の良い餌になります。

これが最近「水ガキ」と云う名前で有名になっている水辺で遊ぶ子供達です。川の中に小さな入江の様なものが有ってよく観ると堤防の下から少し湧水が、伏流水ですけれども河川敷の中に湧いていて、濁って見えますが水はけっこう綺麗です。子供達に話を聞くと去年か一昨年にはここで「ホトケドジョウ」、結構綺麗な湧水に住む魚なんですが、「ホトケドジョウを採ったよ」なんて教えてくれました。これには子供だけしか写っておりませんが、本当はお母さん方も後ろで子供達の遊ぶのを見ておりました。

これはまた更に上流になります。右手の方に見える橋が、川口川というこれも一級河川でかなり大きい川ですが、これが合流してくる所です。左手が浅川です。釣りをする子供がいますが、この辺は鯉が多いんです。あまり鯉が多いと他のハヤとか鮒が食べられてしまって鯉の放流はほどほどになどということを魚類学者の方から聞きましたが、六十㌢位の鯉を釣ったのを見たことあります、三十㌢位のが群れを成して泳いでおります。

ここは浅川の合流点、左へ行くと南浅川、これは高尾山や大垂井峠が源流で、国道二十号線沿に流れて来る川です。右へ行くと北浅川、こちらが浅川本線ということになります。ここのわずか上流のところが指定区間の終わりで、そこから上流は都の管理で、ここまでが建設省の直轄区間ということになります。これはその南浅川側なんですが、南浅川は非常に水の汚い川です。都内の水質ワースト河川の中の常連ですが、これは多分春の早い頃だと思います。

水辺でお弁当を食べているんですね。春先で水が冷たいですからそれほどは臭わないんですが、水は

人を呼ぶんだということをしみじみ感じさせられました。

これは向う側に見える建物が八王子市役所で、その手前に見えるちょっとクラシックな感じの建物が八王子の浄水場です。元本郷浄水場と云ってかつては八王子市のかなりの部分に給水してしましたが、現在は二つの浄水池のうち一つしか稼働しておらず将来的には廃止されて多賀公園として生まれ変わります。浅川の伏流水、浅層地下水を利用した浄水場です。

この写真が私好きなんですけれどもやはり汚いですね。手前はちょうど東京都の河床整成が終わったばかりで前の年の夏にブルドーザーが綺麗に川を均していってくれたんですね。それで全く溝のような川に成ってしまっているんですが、それでもお母さん方はお弁当を食べて子供達と水辺で遊んでいる。

横浜の方でドブ川文化ということを言っている人達がいますが、それを思わせるような、しかし、八王子はドブ川といっても緑がこれだけ有るし、まだ恵まれているんだなと思います。これはそこの上流で桜の時期よりは少し後、初夏の時期に河原にいっぱい菜の花が咲いています。セイヨウカラシナです。

平水時の水量が少ないということ、それから水の中の窒素分が非常に多いということがこの川の状態を見ていただくとわかると思います。ここの右手に見えるのが浅川サイクリングロードと言いまして南浅川の左岸です。この写真はたまたま上流側から下流側を撮っているんですが、そこのところに白く見えるのは植栽されたものではなくて、ノイバラ、野性のバラです。

先ほど写真で見たように立派に修景の役割を果たし、何も植栽されなくても済むんじゃないかと思えるし、この部分にイタドリが生えているんです。イタドリも雑草といえば雑草なんですが、やはり夏場に少しくすんだ白い花を沢山つけて、丁度、ノイバラと交代するように七、八月頃咲くんです。じつは東京都が管理しているこの所で花の咲く直前にノイバラと一緒に夏場にきれいに刈り取られてしまいま

した。

これは同じく南浅川で大雨の直後に子供が二人、かなり危ない感じは致しましたが、堰の所で遊んでおりました。ほっておいても子供というのは水に飛び込むんだなと思って、周りを見渡しましたが保護者もいない。子供のズボンとパンツが河岸に置いてありました。汚い南浅川ですがかなりの大雨の後ですので水質もまあまあだと思われます。夏でもあり子供達も多分溺れはしないと思いますが、ちょっと楽しくもあり怖くもある風景です。

ここは、今、子供達が遊んでいたところからちょっと上流で武蔵野陵にもう近いところです。堤防の桜が大変綺麗ですが、建設省の方でもだいぶん樹木の植栽基準も変わったようですし、どうもこの桜はなんとかなりそうということでほっとしています。

ここは、武蔵野陵入口の南浅川橋という橋です。浅川に架かる橋のうちでは随一の豪華な橋なんですが左手が陵南公園という多摩御陵、八王子では多摩御陵と呼んでいるんですが、武蔵野陵に続く公園です。公園のここが武蔵野陵ということになります。これ秋なんですけれども、欅、桜、銀杏と紅葉が大変綺麗でちょうど最盛期です。おいでになる方にとってこの辺楽しいだろうなと思います。

ここはもう高尾山に近いところです。京王線の電車が見えていますが京王高尾山口と高尾駅です。高尾山口と高尾駅を結ぶトンネルです。上に桜が見えるのでちょうど三月の終わりか四月の始めだと思います。

これはちょっと写真が暗くなってしまったんですが、高尾梅郷と言いましてこのあたり、旧甲州街道沿いに梅の木がたくさん植えられています。これは今の桜の時期よりもちょっと早い二月の終わりか三月の始め位で、とても綺麗な所です。

これも、その小仏の街道沿い、こちら側が南浅川の本線で今の京王線が見えたところの少し上です。左の方に行くと甲州街道沿い、現在の国道二十号沿いに大垂井峠に続く案内川という川、それから右手に続くのが南浅川の本川、八王子では通称小仏川と

呼ばれていますが、そこの岸に咲くイチリンソウ、本当に小仏峠に至るまでの道というのは田園風景も残り、水も緑も綺麗なすばらしい街道です。

ここは先ほどの浅川合流点に戻ります。合流点のわずか上のところでコスモスが咲き初めているので八月の終わり頃だと思うんですが、左手は恐らく昔堤防強化のために植えたのか、あるいは逃げ出したのかニセアカシアなんですね。ここの下のところ、ここはちようど堤防左岸の上になるわけですけれども、丁度、中央高速が八王子の浅川を横切る場所です。ここに関しては左手のニセアカシアは昨年、護岸の改修をして全部切られました。

ここのところが同じ浅川本川、北浅川ですが、そこの上流です。ここで九十年ですか八王子青年会議所が浅川のウオーキングフェスティバルをやった時に歩いている人達を見ました。ここは水がかなり綺麗になっているところです。堤防の下に有るのはツルヨシという清流に生える草なんですが、最近だんだん下流のほうでも姿を見せるようになっているようです。

ここは今の所からだいぶ下流ですが八王子の浅川堤防では随一のよい景観を見せるところです。元八王子と呼ばれる一帯ですが、東京都の管理で川巾も百五十米位あって草の堤防が続き、芝生でとても良いところです。芝生なので自転車も大してスピードもでないし、歩いても気持ちが良いしというところです。右側が河原になります。ここは密かに浅川渓谷と地元で呼ばれている場所で、これは泥岩なんですけれども、処々露出している地層を川が横切っているような感じなんでしょう。私も詳しくはわかりませんが。子供達の間では知る人ぞ知るたまり場です。プール状になっていてドブンドブン飛び込んで泳げる所も随分あります。

これは、今の浅川渓谷のちょっと上流ですが、農業用取水堰で高さ五米位はあります。ここのところで上から落ちて来るハヤを狙っていつもサギの仲間が必ず見られます。

これは、今の所から又だいぶ上に行きまして、さ

っきの浅川ウオーキングの親子の写真が写っていた所のちょっと上流です。左手に見えるのが大きな欅の木です。じつは先日ここを通ったんですけれども欅がすっかり紅葉し、葉を散らしておりまして大変いい眺めでした。川はここでは掘割状になって堤防ではなくて掘込河道になっております。

ここはもっと上流で陣場街道と呼ばれ、夕焼け小焼けの作詩者の中村雨紅の出身地がこの辺なんですけれども、その付近の浅川の様子です。道路拡幅のために川の上に少し道路がはみ出している様子などがわかると思います。

ここもそのわずか上流の所で、水は写真を撮ると写らない位に澄んできております。

これは旧甲州街道の小仏峠の上から、八王子、二十三区の方面を写しました。この辺に見えるのが恐らく新宿のビル群だと思います。ぼんやり見えているのが都内の各高層ビルで、八王子は手前のこの辺で結構広い感じです。左手の方からは浅川本川が、ここからは南浅川が流れて行くそういう場所でございます。

〈スライド終了〉

今見ました通り浅川は非常に良い川だと私は思っております。建設省の方に言わせると非常に怖いとおっしゃいます。それもまた理由のあることだと思います。一応レジメのほうに多摩川水系の中の浅川流域の歴史と文化がありますが、余り大それたことを言えるほど勉強しておりませんので、資料の一番から三番までに簡単な浅川の歴史と、説明が書いてありますのでこれをご覧になって頂き、数字上、こういう川であるということを見て頂ければ宜しいと思います。この資料はちょっと古いんですが昭和五十六年頃こちらの研究会に入っている八王子市の熊井観光協会事務局長が現役のころに係わられたということで現在でも状況はこの通りであります。

それから資料の四番、四ページ、五ページに八王子市の土地利用の資料があります。八王子は市街化調整区域が五十七．五％ございます。また、五ページの五番の地目別の土地面積によれば八王子は山林

原野が非常に多いところということが納得して頂けると思います。これら山林原野が八王子市内の河川の源流になります。一級河川が十八本、八王子に係わっています。多摩川と秋川もその流域に八王子をわずかに含んでおります。そして、他に十六本これは全て源流があります。中にはかなり小さい御霊谷川とか太田川といった川もあります。

多摩川流域で最も典型的な扇状地形を表していることも八王子の特徴で、北浅川の造る扇と南浅川の造る扇の二つの扇が重なった形が八王子盆地の地形だと思って頂ければ良いと思います。もう一つ、地層的には八王子の南半分は多摩丘陵に属します。それから高尾山までの部分、南三分の一は多摩丘陵で、北三分の二は子仏層を中心とする第三紀層が地下に入っています。

次にレジメの二番の浅川を巡る行政と市民活動ということで八王子市が浅川と深く係わっていく部分として先ず、浅川清掃デーというのが有ります。

これは主催が美しい八王子を作る会というところで、建設省の後援も頂いております。八王子市も後援しておりますが、十二ページの左側の資料、建設省京浜工事事務所の昨年度の資料に一昨年の状況が整理してあります。八王子の青年会議所が昭和四十年代の後半に始め五年ほど主催しましたが、その後いくつかの変遷があり、現在美しい八王子を作る会が主催することとなり、八王子市が全面的にバックアップをしています。関係しているセクションは市保健医療部、主に雑草の生えているところの草刈などを地域の方々が行っているということです。

浅川環境整備計画が作成されたのが五十七年、その直前に建設省の方で御存知の多摩川河川空間環境管理計画の策定直後で、丁度第一次の親水ブームと云われた時期に重なりますが、これは南浅川の整備と八王子市役所前に親水公園を造るというこの二つだけが実現しましたが、そのほうが良かったと思っております。

南浅川の整備は、これは武蔵野陵の関係もあるでしょうが、都市河川としてはほとんど模範的と云っ

ても良い位の環境に整備されている思います。サイクリングロード、それから素晴らしい桜の並木を市の手で造りました。八王子市の公園課でフェンスの無い緑道を川沿いにずっと造り非常に素晴らしい所になっており、これは市でも自慢しています。

次に日野市の場合ですけれども、実は日野市は非常に水路行政に力を入れている市町村ですが、資料の十二の一に日野市水路清流の経過ということで説明があります。但し、水路清流課の職員に言わせるとそれほど良い事ばかりでは無いと云っておりました。三面張の護岸改修が行われたり、区画整理の場合にはかなり親しまれていた古い用水路が付け替えされたりするケースも多いということです。ただ日野市では建設省や東京都などと密に行政上の連絡を取っていて、モデル都市の指定を受けるなど、市町村のふるさと水辺活用事業などを行っているということですが、八王子市ではこういったことは行われていません。

次に、今日一番話したいこの市民活動の部分なんですが浅川清掃デーも市民活動として始まった、ということです。スタートは行政ではなく親水ブームがいろいろ言われる中でとにかく町が川に背を向けているのがやっぱりおかしいんじゃないか、川を向いたまちづくりをせよ、というようなことで青年会議所の方が始めたようです。実はこのあと青年会議所は浅川に関しては沈黙を守り続けてしまうんですが、また最近復活したわけなんです。浅川地区環境を守る婦人の会というのは木炭を使った水路の浄化という非常に先進的なことを行いました。余り良い結果は出なかったようですが、住民が住民の手で環境を整備していくということについては非常に大きな意義があったと思います。この人達は現在でも浅川流域の水質検査の活動を続けております。木炭浄化でも臭い取りなどには結構有効だということを取材している方から聞きました。

現在、この会の中心になっていた方が裏高尾の方で圏央道反対運動を一生懸命やっております。その関係でちょっと市の行政とコミットしにくくなって

おりますが、それについてはまた後のわくわくワークショップのところで話そうと思います。

この三番目の川下りサバイバルレースですが、お手元にお配りしたパドルという報告書が出来ました。二百十一チーム乗船者数八百六十名、レース参加総数四千名そしてお客を含めて約八千名と若干水増しはありますけれども、これは全く住民だけの手で行われております。後援も頂いておりますが、これはほとんど精神的なもの、もしくはトロフィー程度に限られております。後援の後ろの方に名を連ねている中で八王子青年会議所に非常に熱心にやっていただいております。実はこのサバイバルレースをやる前前年位に青年会議所で合流都市八王子という川を使ったまちづくりのビジョンを発表したんです。このビジョンというのは川の中に噴水を造ったり、川を二段にしたり下に駐車場を造ったりというものでしたので自然保護団体に反発をかったり無視されたりしました。そのことを青年会議所の人と話した時に、「いや、あれは呼び水だから否定されていいんだ」と云う度量の有る方がいらっしゃいまして、そしてこの川下りサバイバルレースに繋がっていったわけであります。

このレースの趣旨等については中にいろいろ書いてあるんですれけども、要は「汚くても水の中に来てみよう、汚い川でも水辺に寄らなければわからない、綺麗になってから人を呼び寄せようなどと言っていては何時まで経っても人は近寄らない」ということです。中心になっているのは私の世代の前後になるわけですが、水辺で非常に良い思いをした世代です。ところがもう十年私達より若い世代となると八王子の水辺であまり遊んだ記憶がない人達が増えてきています。今の内にこの記憶をつぶしちゃならないという使命感のようなものも若干有りました。

本当は使命感というよりもただ自分が遊びたいだけだったわけですが、遊びたいつもりが主催者の側に回ると川下りが出来ませんので、一番遊びたい人が陸上で走り回っているという、かなりかわいそうな状況だったと思います。

この川下りにはリサイクルの団体がよく参加し、昨年はミルクパックボートが多く出ていました。けれど、浅川は浅くて石が多いんでミルクパックはたちまちバラバラになって川を汚してしまって、下流の方で大あわてで皆んなでそれを拾って回ったということがありました。ここの川を下る時にはタイヤのチューブに太い角材で造るものが一番ということになっております。

次は浅川ワクワクマップですが、これもやはり、青年会議所の創立二十五週年記念事業ということで始まりました。申しおくれましたけれど私ランドマーク研究会というもともとは八王子市役所の職員の自主研究グループとして活動しておりました。市民運動の方とコミットしていくうち、だんだん一部市民の方も参加するようになり、現在では行政と一線を画しています。

この活動をしていく中で、先程の環境を守る婦人の会のような自然保護団体や青年会議所の方々から我々市役所にいるものが、たまたま情報が多いためになにかと相談を受けることが多くなりました。

話をしてみるとどうもそれほど考えていることは変わりがない。何とかこれは繋げなきゃいけないなと、ぼんやり思っているところへ青年会議所の方から話が有りました。「環境をテーマに河川サミットをしたいのだが、ついてはこういう団体に声をかけたい」とリストを持って相談がありました。

そのリストはこの環境を守る婦人の会も含めた幾つかの自然保護団体、バードウォッチングの八王子カワセミ会やらあるいは浅川は一本なんだから日野にも声をかけたいと非常に幅の広い声のかけかたでしたのでこちらも嬉しくなりまして、じゃあこれは全面協力をしましょうということで出来たのがこのマップです。

九月に初めて発行されたのですがその前段で浅川ワークショップというのを作りました。このワークショップを作るに当たって青年会議所と自然保護団体は意見が同じだから手を繋ぐというんじゃなくて、違うけれども同じ場所に住んで同じ川を見てるのだ

から手を繋ごうということで始まりました。　この時、文章の中で八十点主義になるという詭弁も弄しました。互いに自分が百点取ろうとすると相手は逃げて行ってしまうので零点だ。自分が八十点ぐらいで我慢すると相手も八十点だなと思うかもしれない。八十対八十で百六十点の満足が残れば相手の満足だっていいじゃないか、逃げるよりはその方が良いじゃないかという一種の詭弁です。

そういうことで声をかけ、そして何度も行いました。いわゆるエキスカーションフィルドワークを行いまして、浅川を日野の合流点から今回この地図のテーマにしている部分の北浅川、浅川本川ですが、これの陵北大橋、それから南浅川と小仏川の分かれる所、ここまでをテーマにしました。この上は圏央道が通るんでそこは戦争やってるところだから考えないということで双方は納得しました。これが各々我慢した二十点の部分だと思います。

そして先ずこちらのわくわく今マップ、現状の浅川の良い所を説明するということで、お散歩地図とまではいきませんが、にぎやかなものが出来ました。

その裏側のわくわく夢マップというのが一番青年会議所がやりたかったところなんですけれども、この中に建設省の総合治水の話や、自然保護団体の話などが一緒に書いてあります。それ自身大したことではありませんが、それらが住民主導で一緒になれたということになによりも大きな価値があったと思っております。作成の最後のほうになりますと自然保護団体が親水公園のプランを持ってきまして、青年会議所が水と緑のネットワークをどう繋げればよいかと一生懸命マーカーで塗っている、そういった様子になってきました。

これはやっていても楽しかったです。私自身は余り大したことも出来ず、専門知識も無いためにただコーディネートと建設部管理課だという有利さを活かして京浜工事事務所などから回ってくる資料を提供し、意見交換のルールを作る手伝いをしました。まず現状をどうすれば良くなるのかを考えること、それから東京都が悪いとか建設省が悪いとか、ある

いは川を汚す地域の住民が悪いんだとかあの団地が良くないとか、悪者造って吊るし上げることはやらない。それから当事者の立場になって考える。自然保護団体が言いがちな、少し位洪水が有っても良いのではないかという言葉がありますが、洪水は有っても水害があっては困りますので、水害の無いように当事者の気持ちになって考えること、逆に青年会議所の方にも生き物のことを一生懸命考える人の立場になって考えることなどのルールです。

それから参加者には魚類学者、河川コンサルタント等様々な立場の人々、専門家もいれば素人もいるということで参加者は全員平等、肩書を外してもらう代わりに知識と知恵だけはそのまま持っていてもらうという形で意見交換しました。フィールドワークのときは比較的多くの参加者が有りましたが、デスクワークの時は三十人位の参加者でした。

大体五人から七人位のグループに分かれて意見交換をしたわけです。そこで出てきた意見は原則として匿名で発表し、その責任は問われないこととしました。逆にこれは共同責任になるわけです。要するに地図の判る人間が見てくれれば自ずと判るであろうと誰が言ったかそういうつもりもありました。そして意見交換を三回程やりまして大体揃ったところでこの地図に落としていったわけです。

実際はまだ勉強不足の面もあって不正確な面だとか理解がいま一つの面もあるんですけれども例えばスーパー堤防的なものもあります。それから総合治水もあります。川の一里塚も盛り込みました。そういった行政に受け入れられ易く、しかもきちんと作ってある点など、皆我慢してやったと思っております。

わくわくマップは住民が全部自力で造ったものです。二千部作りました。写真は全部持ちより日当は無しで純粋の印刷費と製版費それと若干のデザイン料です。お手元に八王子市都市景観形成基本計画のパンフレットをお配りしましたが、かなり市の予算をかけ、時間もかけて作ったものです。しかも専従の職員もいます。更にコンサルもいるということ考

えますと住民の力量は行政ともうほとんど差はないところまで来ています。そのあたりを行政の方もこれからじっくり考えていかないといけないと思います。しかもこっちのほうが先に出ています。青年会議所の方のおかげで、わくわくワークショップでは楽しく遊ばせてもらいました。

ここで次の市民運動の話に移ります。最近いろいろな水辺の市民運動の話題を新聞などで目にされる機会も多いと思います。新聞などで何度も連載されたケースなども有ると思いますが、流域ネットワークが最近あちこちで出来始めました。千葉県の真間川などにもありますが、東京都の近郊ですと鶴見川です。この源流は東京の町田市です。TRネットというのが出来ました。鶴見川流域ネットワーク、これは住民、行政、企業の協力をスローガンにしている鶴見川を楽しくする会が中心になって京浜工事事務所など行政と上手につきあっています。

それから野川流域では三多摩問題調査研究会というところが中心となって野川ネットワークというのが出来ました。ここも住民運動の盛んなところで、三多摩問題調査研究会も美濃部都政時代からですので、もう二十年位、野川流域で環境問題についてずっと活動しているグループです。又他にたくさんの流域の団体と手を結んでおります。それから浅川ネットワークなんですが、これは今年出来たばかりです。現在のところ十幾つかの団体数が有り、個人団体合わせ概ね百通位のニュースレターを発行しております。十七ページのところにネットワーク通信というのが出ておりますが、もっかのところこの十月二十二日号が最新です。本当は今頃出さなきゃいけないんですけれども実は私が編集担当でいろいろ忙しくて出来ないので今回は半月延ばしということでやっています。こういった流域ネットワークがそれぞれスタイルの違う住民運動どうしが、地域住民という結節点を持って情報交換を行うというのがその特徴だと思います。

鶴見川ネットワークの場合、町田市の中に鶴見川源流自然の会というのが有りまして、非常に頑張っ

て地域活動を行っています。けれど行政との関係づくりの中で苦労していたようですが、ネットワークづくりの中で意見すぐを取り入れてもらえるところまではいかなくても一応公開の場で討論したり、あるいはその団体が主催する会合に町田の市長や京浜工事事務所の課長さんなどが出席してくれるようになりました。鶴見川はこのように非常に行政との関係がいいんですが、野川などは逆に行政と対決する力量の有る住民団体がここには揃っております。

一昨年でしたか、野川流域で東京都がコンクリート護岸の工事をしたときに剝がせという運動を行って元にまた戻させたという位、力のある人達が緊がっております。浅川にははっきりいってまだ実態が有りません。このニュースレターを出しているのが精一杯です。ただわくわくマップを作る過程で開発指向の人達と保全指向の人達との間に人間的な信頼関係だけは持てるようになりました。あの人達の言うことならと、あるいは何か有ったら彼らを呼ぼうという程度の関係は出来ました。それだけでも大きな収穫であり、これをもっと伸ばしていかなくてはと思います。

次の二番目の行政との係わりということですが、これに関して多摩ライフ二十一という大きな事業のプレイベントが既に始まっております。多摩ライフ二十一の中で水に直接係わるのが湧水崖線、多摩川の湧水と崖線を残すという部会と多摩川の復権と云う二つ部会があって住民運動とコンタクトをとっています。多摩ライフ二十一は非常に怪しげなものだから近寄らないという住民団体もかなり有ります。それから積極的に関わって税金を取り戻すんだと言っている方々もおります。ただ積極的にコミットしている人達は、行政に手を貸していると一部から言われるのは覚悟しなくてはいけないでしょうが。

ただ湧水崖線部会の方は東京都の関係者の意向もありましたが、かなりきちんとした住民運動団体も一緒にやることになりました。そしてその時に問題になったのは現実に問題が起こっている場所です。レジメにある北山公園、高尾山、とこれ以外にもい

っぱいあるんですけれど、行政と住民が対峙しているという問題があったときに、始めはそれを除外してという話だったのですが、問題をテーマにする必要はないが問題が有るということだけは認めるというスタンスに立ってもらうことになりました。それを解決する方法を多摩ライフで作れという無理なことは言わない、但し無いことにしてしまっては住民が関係する意味も全然無くなってしまう、有ることだけは認めて下さい、それで結構ですということで住民側は問題点を一生懸命探っています。

多摩川部会の方も住民運動と関係を持っている方々がアドバイザーという形で係わっているので希望を持っております。そして東久留米市の落合川、それから秋川市の平井川、この二本は五十ミリ改修の係わりの問題です。現在、東京都の建設行政の方々に対してはかなり住民が批判的になっています。例えば、この落合川で今年の始め頃住民側が行政に対して対案を作りました。そして東京都の方はその対案は呑めませんということで返したのですが、その対案を作ったときに別の行政体で河川の仕事に関わっている方も参加していたのです。他の行政区域では認められる部分ですら受け入れられないということで住民団体は不信感を持ったのです。

平井川は浅川からかなり上流、秋川の一本上に当たる川で、これは田園河川の風情があるところでした。県央道や、秋留台開発の将来的な含みも有って今、改修されているのですが、平井川らしい田園河川の風情を残したまま、もっと治水上の安全を求められないのかということが地元で言われています。

実は八王子の南浅川などと良く似た川に平井川がなりつつあって、南浅川っていうのは非常に周りが都市化した川ですけれども、要するに東京都内の川というのは何処へ行ってみても同じような造り方で川らしい川が少ないのです。

景観に配慮するということで河岸に巨大な石を積んだのが野川ですが、こ野川というのは元々平野の川であり武蔵野を穏やかに掘り割って流れている赤土と黒土の層が見えるような、そういう川なんです。

その川岸に巨石を並べて多自然にしましたという返答をもらって住民は唖然としています。こういうのは、秋川の上流とか多摩川のダムの上の方とかそういう所でやって欲しい形態でした。そしてこの東村山の北山公園というのは、一番最後にくっついております。北山田んぼ通信にいろいろ書いてあります。反対している人は少数派で、大多数の市民はあまり関心をもっておりませんが　理屈はこの人達の方が正しいと思います。自然を尊重すると東村山市は言いながら事前の生き物調査をしておりません。市がいくら自然を大切にするといっても事前調査をしなければどうしようもありません。施工段階でいくら自然を大事にするといっても無理です。

高尾山の圏央道に関しては問題が難しすぎますが、目下のところ行政と住民の間の信頼関係が少なくともこの裏高尾の一ケ所では切れているのが最大の問題だと思っています。かなりこじれておりますのでこれ以上のコメントはちょっ出来ません。

こういった様々な問題のある中から今度、三多摩自然環境センターというものを造ることになりました。資料の左側、ニュースの一ページ目に、三多摩自然保護団体環境センターはネットワークとしてであり、運動体では無いということを宣言しております。自然環境情報紙の、例えば、ぴあみたいなものを作りたいというのがそもそもの始まりです。事務局は有れどもトップはおりません。多摩川の自然保護運動に長い間係わってらして先年亡くなられた横山理子さんの旦那様で大学の先生をなさっている横山十四男さんという方に代表となって頂いているんですけれども、この方も別に権力はない。そういうグループです。そして幾つも今言ったような形での地域のネットワーク同士の交流が有り、ネットワークに属している単独の団体同士の交流があり、そしてまたこの大きなネットワークがあるということで住民団体の情報交換が非常に活発になっております。

実はこのきっかけの一つもやはり行政でした。何処の川もみんな同じになるのは何故だろうと、向こうは一つでやってるけど住民がバラバラにやったん

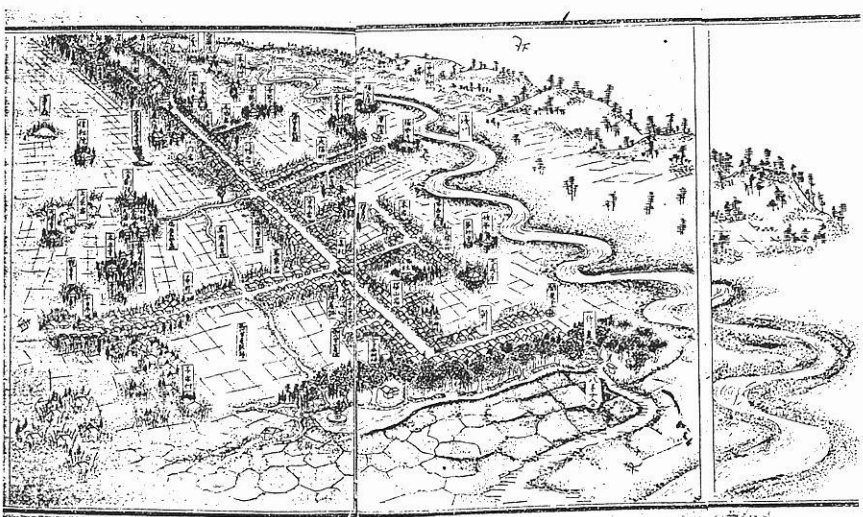
じゃこりゃだめだと、そのあたりがきっかけの一つになっております。こういった住民運動をしていても私自身は八王子市役所の建設部管理課に席を置いてますので、市役所の仕事として道路と河川の管理の仕事を行っています。間接的に役にたつことはあっても、こういうことをやっている部分はなかなか仕事には直接還元させることは出来ません。あまり仕事に直接活かそうとするとどうしても摩擦が多くなるので住民と一緒に動くことが多くなります。

市役所というのは別に秘密ではないけれども住民に教えていない情報が沢山有ります。例えばわくわくマップを造るときに使った総合治水の情報、京浜工事事務所へ行くと沢山パンフレットなどが積んで有りますが、八王子市民の大多数は総合治水という言葉も実態も知りません。でも総合治水的な考え方というのは今日の治水の原則ですからやはり知らせなければいけないと思います。

そういう中で住民の人達と一緒にやって思ったのですが、やはり町の基盤というのは自然環境なんだなと、都市基盤の整備などと我々仕事の中で言ってるし又やっているわけですけれども都市基盤というのはやはりそこの土地を流れている川や山であるなと思いました。なにより証拠に流域下水道というのが有るじゃないかと、下水道というのは基本的にやはり川の流域に沿って下へ流れていくという形でやっているわけでインフラの中でも代表的なものがそれに従っているじゃないかと、さらに例えば中央高速道路だって昔の甲州街道とあまり変わらない所を通っているわけですね。甲州街道は元々八王子周辺を通っていましたが、若干山を割ったりしている部分もあります。こうしてみるとやはり自然環境やあるいは歴史環境というのが本当の町の基盤なんで、基盤整備というのはそれをさらに少し整えていくということにあるんじゃないかと思います。多摩ニュータウンというのが八王子にありますが、多摩ニュータウンにベルコリーヌ南大沢というたいへん素晴らしい、多摩ニュータウンで公団が造った中では一番といわれる住宅が有ります。九十年に出来上がり

、そこのキャッチフレーズが南ヨーロッパ、スペインなどの山岳都市ということですが、あそこは多摩丘陵なんです。何故それをスペインの山岳都市というのか、素晴らしい斜面住宅なのに何故多摩丘陵住宅と胸を張って言えないのか、スペインの山岳都市のイメージじゃないと売れない都市というコンセプト、そのコンセプトに対して私は今非常に問題を感じております。住都公団に対して私がこんなことをいってもなんにもなりませんけれども、ちょっと気になっている部分です。

多摩ニュータウンがまるきり白紙の上で造られた町みたいに思われてますが、やはり歴史もあり伝統もあり自然環境もあります。下水道の幹線は大栗川のところを流れていっているわけですが、いくら谷戸を埋めようが、いくら丘を削ろうが基本の丘陵と大栗川水系というのは変わらない。そこに白紙の上に絵を画くような町を造っているという錯覚をもたらす。設計している人は当然そういったものを意識しているはずですのに錯覚をもたらすようなキャッ



13　八王子宿全景（新編武蔵風土記稿）文政5年（1822）

新編武蔵風土記稿 国立公文書館所蔵、「八王子宿のうつりかわり」（八王子市郷土資料館）より転載。

チフレーズで動かざるを得ない状況となっており、なにかまずいんじゃないかと思っております。

どこがどうまずいかは今は言えませんが、ただ陣内秀信先生が東京をもう一度ベェネチアのような水辺都市として見直そうということで、東京の中に江戸を見るんだということを言ってますが、都市計画の原点からまちを見直す、そういったことが一つのヒントになるのかなとは思っております。　又、この自然環境といっても手付かずの自然という意味ではなくて、人が手を加えてきた自然であります。堤防の在る河川と農地と森林の三つが最初の自然破壊と言われていますが、都市などというのは自然破壊の順番からいけば一番最後にやってきたものです。ですから自然保護団体が川の自然を守ろうと言うともうこれは矛盾したことになるわけで本来河川というのは一雨降ると何処に流れていくか分からないものだったのが両側に堤防を造り治めて今日の川という形態になったわけで、既に自然のものではなかったわけです。但しそれはその中に技術力の限界ということもあったし長い目でものを見たということもあるんでしょうがかつては生き物を包含していたわけです。

レジメの八十ページに大栗川が写っていますが、大栗川自身長い歴史の中で、多摩に住んでいる人の手によっていじられてきた川ですが、このように直線化しコンクリートで固めることは、川と一緒に生きていくためには本来大変まずいことだと思います。

植物の現地調査をする方について歩くことがたまにあるんですが、農地と河川敷と雑木林の中で一番植物、動物の種類がたくさん見られるのは農地の畦道です。これは何処を見ても草が刈られて同じように見えますが、田圃の一枚一枚の角度や位置によって植物の組成が重なり、非常に豊かな植生になっております。勿論、なかには帰化植物や畑から逃げ出す植物も混ざっているし、あるいは野性の植物もある。人手が一番加えられ、絶えまなく草刈されている土手が実は非常に密度の濃い生態系をつくっている。三月頃に田圃に言ってみると分かるんですが田

圃の端で概ね三十種類の花が咲いてました。河川敷で十種類位咲いています。雑木林の中だと一つか二つがやっとです。だいたいその位の比率ですね、これは春だけでなくて夏、秋もずっと続きます。その雑木林自体も奥山に比べ、生き物の種類はけっして少なくありません。大型の動物類がいないだけで昆虫や小型の動物類の生息密度は非常に高く、植物の種類も多いところです。そしてこれはこの前聞いたんですが、昔炭焼をしていた里山が最近、儲からなくなり草刈しなくなったため奥山になっちゃった。荒れちゃったんですね。人が入りにくくなって猿や鹿なんかがそこまで出てきてしまう。何故出てくるかというと奥山がみんな植林されて里山的になってしまった。奥山が里山化し、里山が奥山化すると出てきた鹿や猿は人里に出て作物を荒らすといった環境が出来てきているということです。

ここで一つ気が付くのは過剰な人工化も、過剰な自然化も両方人間にとって不愉快であるということです。大栗川が非常に不愉快な川です。川沿いに歩いいてもちっとも面白くありません。笹だらけになった雑木林も極めて不愉快な場所です。本当に歩き難くて蚊も多いいし、良いことなんか何もありません。やはり、ほどほどに人工化されている部分、ほどほどに野生が残っている部分、人と生き物が相互に行き来しているようなゆらいでいる部分がとても大事なんかじゃないかと思います。

最近はファジーとか隙間の空間などに人々が注目するようになりましたが、それが有っても良いのではなくて、どうもその部分こそが豊かさであって、物事を全て有効的に利用するのが豊かなんじゃないのだなと思います。有効利用の果てはなんか砂漠のような感じです。自然に放っておけば一番自然に戻るからいいじゃないか、といって放置しておくと荒れてしまう。逆におもいっきり有効利用した場合、例えば河川を一番有効利用するため、排水路として断面を大きくする、そうするとあまり面白くなくなる。逆に、中途半端な川で危ない川だと云われている浅川が、とても楽しい川ではないかと感じられる。

このあたりは自分達がこれから勉強していかなくちゃいけない部分だと思います。

ただ安全と環境は両立させることができるとも思っています。また、建設省から平成二年度に多自然型工法の通達が出ました。私は落語が好きなんで思いきりよいしょしますが、このとおりにやれば建設省は日本最大の自然保護団体になれると思います。これは職場のせいもありますが、建設省から来る情報が最近多い。少なくとも河川局関係の情報に関し、自然保護団体の人に話をするともう気持ち悪いから止めてくれと言われます。建設省の河川関係では環境に対して深い配慮がなされはじめていると思います。

例えば魚の登りやすい川モデル事業なども建設省という人間のため以外に働かなかった官庁が、魚以外誰も喜ばない事業をしたということでこれは非常に画期的だったと思います。また、近く行われる河川法の改正で、そのなかに環境が盛り込まれるということで実際にどんなものが出るか非常に楽しみにしています。ただ、この多自然型川づくり実地要領、これについて市町村の職員はやはりなかなか知りません。月刊建設やそういう雑誌に載っているのでかろうじて知識として持っている程度です。東京都に関しては、この要領は東京都で止まってしまい市町村に流れてきませんでした。

そして次のエコロード、この情報に関してもなかなか住民に伝わらず、市役所レベルで止まってしまいますが、非常に良いことだと思いますし、この方向性は間違っていないと思います。建設省の河川局もかつての階段護岸から現在の多自然型まで、どんどん変化しているわけですから、こういうスタートがとても大事だと思います。こうやって貯ったノウハウが活きていけば日本中が変わっていくのかなとも思います。上級官庁の政策を云々するような生意気なことを言って非常に申し訳ないんですけれども、今話しているのは生き物好きの一人として話しているわけです。

このレジメの最後の共生型まちづくりに向けてと

いうことですが、この共生型ということが社会福祉の場でも言われておりますし、その他様々な場で言われております。先程、わくわくマップで私達が学んだ、違っているから手を繋ぐ、という新しい地縁型のコミニティを作らなければいけないんじゃないかと思っています。

かつてコミニティというのは、その地域での繋がり、地縁型のコミニティそのものがコミニティであって、今でもそういったコミニティ幻想みたいなものもあると思います。実際には私達が現在住んでいる所でなくともコミニティとして選べるわけです。カルチャースクールも一つのコミニティだし会社に行っても一つのコミニティです。そういったサークルだとか宗教団体だとかいろんなコミニティが実際には選べるわけです。

これらはアイテム型コミニティであり、魅力あるコミュニティを作らなければ違う所へ行ってしまうということだと思います。ですから地域で新しい魅力のある地縁型コミュニティを作らないと、やはり地域の問題というのはなかなか解決しないんじゃないかと思います。その地縁型コミュニティというのは生まれ育った環境と町づくりがバラバラにならずに一体となったものから生まれてくると思います。様々な人達と会話してみると、特に環境の問題に関してはどうも大きな合意が、今、出来つつあるんじゃないかと思います。

実は八王子の青年会議所の人達が中心となって八王子の開発プランを作っています。その中で、開発指向の人達で造った団体でありながら、水と緑のアメニティというプランを一番先に出してきました。少しは分かってきたのかなどと云う自然保護団体の人もいますけれども、そこから始まればきっといろんな話し合いがまた出来るんじゃないかと思っています。そのアメニティもツルツルピカピカしたアメニティではなくて、例えば、最近よくトンボ池を造るなど、生き物を町に呼び戻そうと云う話を聞きます。トンボはハエなどを食べて生きていますから、トンボのいる町はハエ・蚊のいる町です。蛍のいる

所も蚊が多いし、生き物のいる町というのは鳥が多くなり糞が落ちます。このような生き物がらみのアメニティから、そこで今までのアメニティとは違った価値判断も迫られている時代が来ているのかなとも思います。

どうも話している事がバラバラになってしまいましたが、これで一応終わりとさせて頂きます。長い時間、有り難うございました。

（司会）　ここで今日御出席の皆様からの質問、御意見等をお聞かせ願いたいと思います。時間の都合で全部の方というわけにはいきませんが、どなたでも挙手をして御質問して頂ければと思います。

（質問）　私の方から一つ伺わして頂きます。今日の出席者に下水道に関係している人達が多い関係から、浅川という川を見て、その流域で下水道が未ださほど普及していない地域も多いのではないかと思いますが、下水道との係わりで浅川をどういう感じで市民の方がご覧になっているかちょっとお聞かせ下さい。

（鈴木）　八王子の下水道に北野処理場というのが八王子市内に有り、コミニティプラントは別としてその処理水を浅川に流しています。それから新しく稼働を始めた八王子処理場は多摩川ですね。浅川処理場というのが日野にありますが、これも多摩川が放流先になっていると思います。ですから浅川に戻ってくる水というのは上流域が普及してくるとかなり寂しくなってしまうんじゃないかと思います。但し、浅川の水質からいうと下水道の普及は望ましいと思っております。サバイバルレースのボランティアで川の中で半日カヌーの誘導というのをやりましたが、トイレットペーパーが絶えまなく流れてきます。生のウンコも流れてきます。その他、なんでも流れてきます。こういう状況の中でとにかく単独処理浄化槽の処理水だけじゃなくてどうも直接雑排水管に下水をつないでしまっている者も少なからずいるな、という印象を持っております。今の八王子の北野下水処理場の水は基準はクリアしていることに

なっています。しかし総量から云うとあまり綺麗ではないと思います。下水の話をあまりすると先日これをお話した熊井局長がおりますのでだんだんボロが出てしまうんですが、まだ普及率が八王子は四十%台で非常に低い。野川で下水が普及して百%近くになった時に画期的に水質が改善されています。但し、水量は激減しました。ですから今の野川の問題は水質の問題ではなくて水量の問題であると聞いています。

（質問）　……（木炭での河川浄化について）

（鈴木）　この木炭での浄化ですが、八王子に炭焼の神様みたいな方、農水省で木炭の研究をされていた杉浦さんという方ですが、炭焼の会というのを作り海外でも活動していらっしゃいまして、この方の指導で地元で先ず地元の間伐材を使って炭を焼きまして、それを編笊に詰めて水路に二百キロから三百キロ敷きました。これを水路に敷くと一時的には非常に綺麗になります。ただその木炭に目詰りが起きると浄化能力が著しく落ちる。

実際にその最大浄化能力を発揮するのは木炭の表面上に微生物が膜を作った時で、目詰りが起きる寸前が一番いいんですが、それからすぐ目詰りしてしまって短時間で浄化能力が落ちてしまう。ですから数ヵ月単位で引き上げてたつぷり微生物膜の付いた木炭を畑につき込み、土壌改良剤にするわけです。

そういうサイクルが出来ればいいんですが、ここは環境を守る婦人の会なもので女の人ばかりで二百キロも三百キロもある炭を何度も水路から引き上げねばならない。これで挫折してしまったというわけです。力仕事の面で絶えきれなかった。わくわくマップの夢マップに婦人の会の方が「ストッキングに入れて排水口に沈めるとどぶ臭が消えます」ということを書いてありますが御婦人の腕力で出来るのが丁度この程度かなという気が致します。この前何処かで木炭でやって結果が良くないので活性炭（ヤシガラ活性炭）に切り換えたという所があったようでした。木炭の資料はこの八王子の環境を守る婦人の会にありますので必要ならばいつでも取り寄せ致し

ます。

（質問）　……

（鈴木）　今日は環境保全関係のデーターを家に置いてきてしまいましたが、水質の観測を東京都の方で定期的に行っており、一部の地点を除いて環境基準はクリアしているはずです。浅川では上流の南浅川、川口川などで基準値以下になる場合が時々あるという状況のようです。水質の問題というのはよく魚との係わりで出るんですが、魚類学者の方に言わせると、水質というのは魚が住むための条件としては五番目から六番目だと云います。魚に限らず生物にとって水質との係わりはよほど致命的なものが流て来ない限り、例えばＢＯＤがどうのとかＣＯＤがどうのと言っても酸素が無くなっちゃえば別ですけれども、魚というのは、いや魚に限らず生物は結構したたかに生き延びていきます。問題は河川の構造の方にあると思います。瀬や淵、そういう物との関係だと思いますね。いくら綺麗になった水でも生き物が住まなきゃしょうがないですから。

（質問）　討論の原則というか意見交換の原則というのを浅川わくわくワークショップのところで五点ほど言って頂いて非常に面白く聞かせて頂いたんですが、加えて政治との絡み、政党との絡みみたいなところでなんか原則を持っておいででしたら教えて頂きたい。

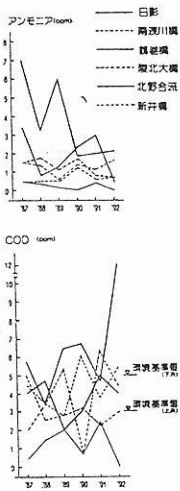
（鈴木）　政治とは関係は持ちません。あとは個人で自由にコミットはしております。例えば選挙のときなど実際に政党と関係を持っている団体もあります。それのら青年会議所ＯＢの保守系の議員さんもおります。ただそういった方と話をするときに政党や政治的な肩書は取って頂くようにしています。一人の市民として肩書さえ取れば結構だと思っております。

（司会）　時間の関係で他に御質問がございませんでしたら鈴木さんのお話はこの程度と致したいと思います。宜しいでしょうか。鈴木さん、どうもいろいろ有り難うございました。

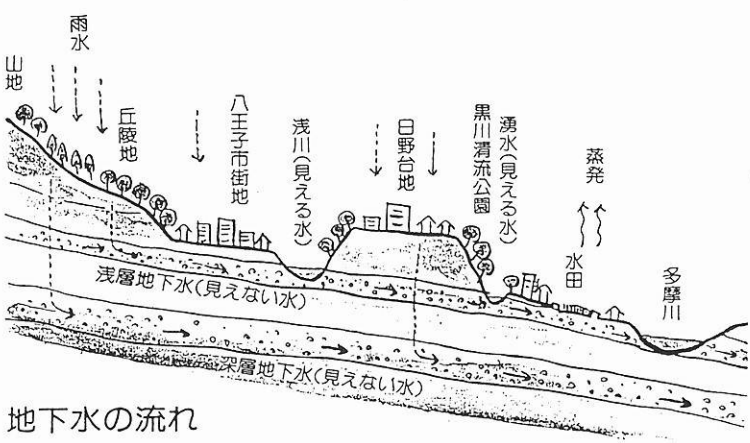
流域水質汚染マップ 年間平均値（合成洗剤）(MBAS mg/l)

●は調査地点を示す

＊各々、調査項目の数値が大きいほど、汚染度は高い。



浅川流域を全体で見ると上流では川の自浄作用で、汚染度は低く、中流域（八王子市内）では、生活雑排による汚染度は非常に高い。日野市に流入し、長沼橋下流域では再び川の自浄作用（芋川・湧水）により、汚染度は半減するようです。



地下水の流れ